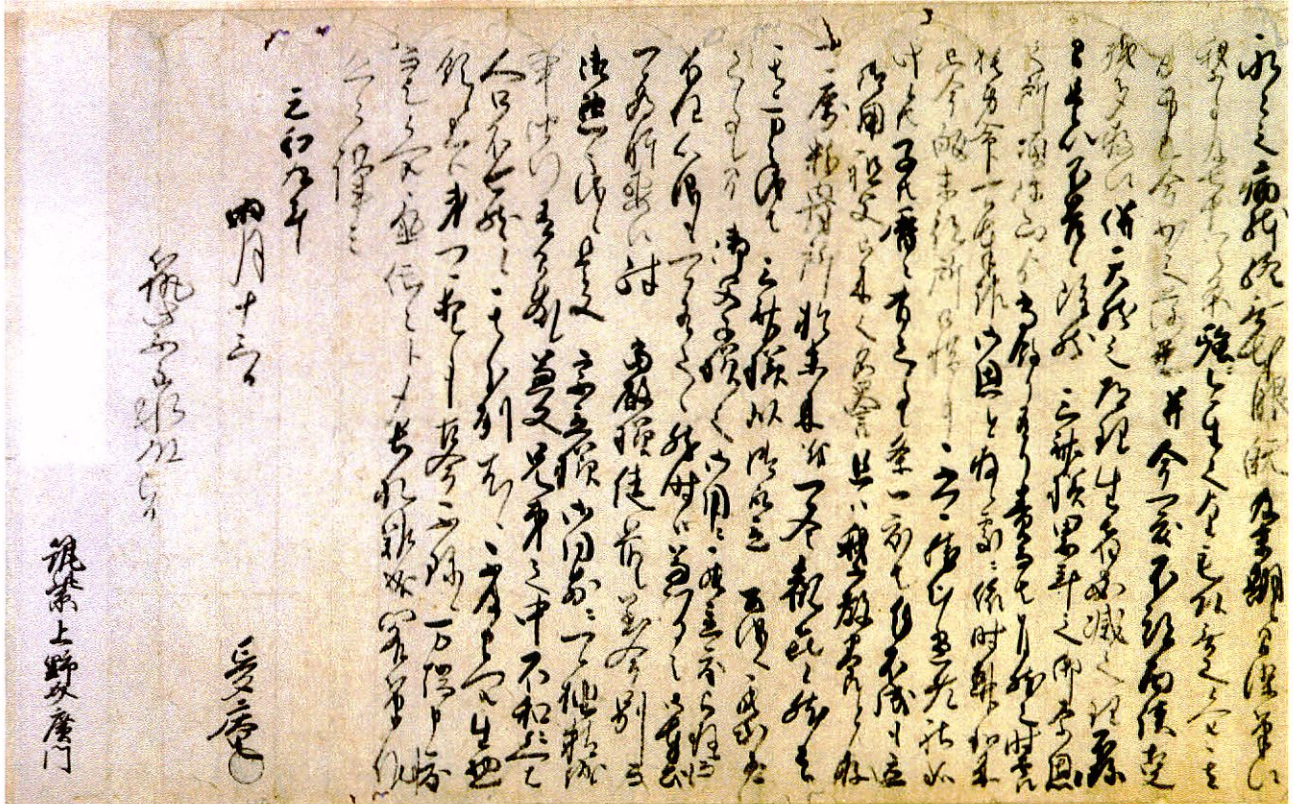


ちくし
筑紫氏

鳥栖市教育委員会



筑紫夢庵広門書状（福岡市博物館所蔵）

勝尾城主筑紫氏の出自については諸説ありますが、一般的には、藤原家の流れをくむ武藤氏の一族といわれています。武藤氏は鎌倉時代、源頼朝の命で筑前、肥前、豊前、壱岐、対馬の五ヶ国を統括する鎮西奉行として関東から下向し、朝廷から大宰少貳の官職を得て、大宰府を本拠に少貳氏を名乗ります。

この少貳氏は、九州における武家の頭領として戦国時代後期（16世紀中頃）まで、北部九州を中心に勢力を振ります。その有力な一門が筑紫氏とされています。

江戸時代の『寛政重修諸家譜』によれば、筑紫尚門の代に筑前国御笠郡筑紫村（現在の福岡県筑紫野市原田付近）を領したことから、筑紫氏を名乗るようになったといわれています。またこの時期、筑紫氏は地元筑紫神社の社司も兼ねていたと筑紫神社の由緒書には記されています。現在、その城館跡には「矢倉」、「城の越」などの地名が残っています。

筑紫氏が勝尾城を本拠に勢力を振るようになるのは、筑紫満門の代で、明応6年（1497）周防（現在の山口県）の大内氏に属し、勝尾城を本城に、東肥前の郡代職となった頃からと考えられます。

筑紫氏・勝尾城関係年表

年号	西暦	筑紫氏・勝尾城関連事項	参考事項
応永30年	1423	九州探題 ^{きゅうしゅうたんたい} 渋川義俊 ^{しぶがわよしのし} 、少弐満貞 ^{しょうにみつさだ} らに攻められ勝尾城に入る。	
応永31年	1424	義俊、少弐一族の筑紫教門 ^{のりかど} に攻められ筑後へ落ちる。	1467 応仁の乱
明応8年	1499	筑紫満門 ^{みつかど} 、亀尾城 ^{かめお} （福岡県那珂川町）にて渋川義基 ^{しぶがわよしもと} を追い落とし、勝尾城に入る。『九州治乱記』	1543 鉄砲伝来
永録2年	1559	筑紫惟門 ^{これかど} 、二千人の兵で博多を襲撃し、大友氏の代官を追討する。	1560 桶狭間の戦い
元龜2年	1571	筑紫広門 ^{ひろかど} 、龍造寺隆信 ^{りゅうぞうじたかのぶ} と和平を結ぶ。	1582 本能寺の変
天正14年	1586	鳥津の軍勢、高良山に入り勝尾一帯を焼き討ち。勝尾城落城し、広門、久留米大善寺 ^{のうへい} に幽閉されるが、のち脱出し勝尾城を奪回する。	1586 秀吉の九州征討
天正15年	1587	広門、豊臣秀吉の鳥津攻めに加わる。 秀吉の九州国割りによって、筑後の上妻郡 ^{こうづまぐん} 1万8千石を与えられる。	1592～98 朝鮮出兵 (文禄・慶長の役)
慶長5年	1600	関ヶ原の戦いで西軍に加わり、敗北。所領没収、広門、剃髪 ^{ていはつ} して夢庵 ^{むあん} と称し、肥後の加藤家の扶助を受ける。	1600 関ヶ原の戦い 1614～1615 大坂冬・夏の陣
元和9年	1623	広門、豊前細川家の扶助を受け、小倉にて病没。	

これ以後、筑紫氏の勢力が最も強大となるのが、筑紫惟門・広門の代です。その所領の規模は、鳥栖市を中心に佐賀県基山町、北茂安町、福岡市早良区、筑紫野市、大野城市、那珂川町などに及びます。

また、江戸時代に記された『城数之覚^{じょうすうのおぼえ}』によると、28ヶ所を数える城を有していたと記録されています。

天正14年（1586）、九州制覇をめざす薩摩（鹿児島）の鳥津氏の2万とも3万とも伝えられる軍

勢の攻撃によって勝尾城は落城し、城主広門は久留米の大善寺に幽閉されます。その後、再び勝尾城を奪回した広門は、天正15年（1587）の豊臣秀吉の九州攻めに属し、その功績によって筑後国上妻一郡（現在福岡県八女地方）の1万8000石の大名として鳥栖を離れます。

慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いでは西軍に属し、その敗北によって筑紫家は改易され、広門は肥後（熊本県）の加藤家さらに細川家の客分として、晩年を過ごすことになります。



筑紫神社（福岡県筑紫野市）